



ナルコレプシー

イヌの病気に対する原因遺伝子が昨年、初めて単離されました。その病気の名前は「ナルコレプシー」、つまり、抑制できない睡魔の頻発する病気です。

今回発見された遺伝子はこれまで餌を食べる行動の調節に関わる遺伝子として知られていましたが、同じ遺伝子が睡眠障害に関しても重要な役割を果たしている可能性が出てきました。

ちなみに、私たちのほとんどは人生の3分の1を寝て過ごすのですが、睡眠の役割についてはまだよくわかっていません。睡眠はエネルギーを節約するためであると、かつては信じられていましたが、睡眠中に脳と体の代謝は共に増大する²ことから、この考えはまちがっていると現在では考えられています。

米国国立衛生研究所 (NIH) は、予告なしに急速に眠気に襲われ、脱力発作に苦しめられるナルコレプシー患者の数は、アメリカ国内でほぼ 20 万人にのぼると推定しています。ヨーロッパ、日本、および米国についてまとめたナルコレプシーの発症頻度は、1000 人あたりほぼ 0.2 から 1.6 人ですが、実際にナルコレプシーであると診断される人はこのうちのほんのわずかであるに過ぎません。

ナルコレプシーは、日本語では「居眠り病」といわれ、ちばん基本的な症状は、昼間に強い眠気がくりかえしておこり、どうしても耐えられなくなってしまう「日中の眠気」です。もちろん、日中の眠気は、前夜の睡眠不足のときや食後などの条件によっては誰にでも起こりますが、ナルコレプシーの場合、よく眠っていても空腹でも関係なく眠気がおそい、また毎日くりかえして眠くなり、しかも一日に何度もおこるといいます。この眠さを健康な人にたとえると、48 時間眠っていないときの眠さと同じ程度だと言います。

ナルコレプシー患者は、起きている状態と眠っている状態が自分自身ではうまく区別できておらず、通常の活動を続けながら、全く予期しないときに意識が完全でない状態に落ち込むことが知られています。彼らは単純な作業ならば、作業は行いながら、実は突然に眠り込んでしまうのです。そのため、職場で厳しくしかられたり、配置転換や退職に追い込まれたりします。病気だということを自分で知らず、また、周囲の理解もないのでちゃんとした治療を受ける機会が与えられないままですと、社会への適応力が小さくなります。

ナルコレプシーの最も普通の症状として、日中の極端な眠気の次にあげられるものは、脱力発作です。脱力発作は随意筋³に突然起こる完全な弛緩状態ですが、これが怒り、恐怖、笑い、期待、喜びといった強い感情によって引き起こされます。脱力発作が軽度の場合には、筋肉の緊張減退からジグザグ歩行、話し方の不明瞭さ、顎のゆるみなどが現れます。人間では稀ですが、極度の重症の場合は脱力発作により床に崩れるように倒れてしまうこともあります。

目下の所、ナルコレプシーに対する治療法はないといえる。現在は夜はよく眠る薬を服用し、昼は目を覚ます薬を服用する対症療法ですが、今回発見された遺伝子をベースとしたナルコレプシーのメカニズムが哺乳類の睡眠を調節していることが明らかになれば、新たな治療法が糸口となり、ナルコレプシー患者が覚醒中に意志に反して急に眠り込んでしまうことをくい止めてくれるのではないかと、という期待がある。

² Mignot

³ 【随意筋・ずいいきん】脳脊髄神経の支配を受けて、意思によって動かす筋肉。骨格筋・肛門括約筋、舌・咽頭・喉頭の筋など。形態的には横紋筋に属す。